韓国人大学生の先輩に対する
「親族名称」と「実名」の使用に関する適切度を決める諸要因

林　炫情
玉岡賀津雄

要旨: 本研究では、韓国人大学生を対象に、先輩に対する「親族名称（垂直的呼称）」と「実名（水平的呼称）」の使い方の適切性判断とそれに及ぼす要因について検討を行った。その結果、韓国の大学生の場合は全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが適切であり、実名を用いるのは適切でないと判断していることが明らかになった。また、「親族名称」の使用には親疎関係が最も強く影響し、その次に話し手の性が影響していた。一方、「実名」の使用は、場面（授業中・雑談）の違いが最も強く影響し、次に親疎関係が強く影響していることが分かった。また、本研究では、大学生の先輩に対する「親族名称」使用は相手との距離を縮めるための呼称として、「実名」はインフォーマルな場面よりはフォーマルな場面でより相手と距離をおくための呼称として用いられていることが示唆された。

キーワード: 親族名称、実名、水平的・垂直的呼称、適切度、韓国人大学生

1. はじめに

韓国は地位や年齢の上下関係によって呼称表現の使用が決まり、相手が非親族の場合であっても目上の人であれば実名だけでは呼びにくく、垂直的呼称である親族名称や地位・役職名で呼びかけるのが一般的である。そのため、目上の人に対して実名で呼び合うという水平的呼称については、違和感を覚える人も少なくない（林・玉岡・深見, 2002）。しか

し、近年の韓国社会の価値判断の変化[1]とともに、韓国の職場では目上の人に対して「姓名＋ssi」「姓名＋nim」といった実名で呼び合うという水平的呼称使用が肯定的に受け止められつつある（林・玉岡, 2004）[2]。そこで本研究では、韓国における目上に対する垂直的呼称と水平的呼称の受け止め方の現状をより広く把握するため、職場での人間関係とは異なる人間関係を形成すると予想される大学生を対象に、先輩に対する垂直的呼称（「親族名称」）と水平的呼称（「実名」）の使い方がどのように受け止められているか、またそれにはどのような要因が影響しているのかについて検討することを目的とする。

2. 韓国語における「親族名称」の虚構的用法と「実名」使用の実態

韓国語の親族名称の虚構的用法について崔（1979）は、韓国のように封建的な社会組織を基礎としている国では社会的な上下関係を表すことばで相手を区別する必要があること、また人称代名詞の使用が極度に制限されていることがその背景にあるとしている。呼称語には話し手・聞き手の社会的関係をことばで確認する機能（鈴木, 1970; 井上, 1991）があり、このような親族名称の虚構的用法は緊密な仲間関係の確立のための手段（原, 1979; 林, 2001）の一つであることは確かであろう。つまり、あたかも同一家族の成員であるかのような呼称を用いることによって、親族でない人との密接な人間関係を作り上げることができるのである。

この現象は日本語においてもみられる（鈴木, 1973; 原, 1979; 井上, 1991）が、その用法には日韓両言語で違いがあることが指摘されている。例えば、日本語と韓国語では、兄・姉を意味する「お兄さん・お姉さん/hyeong・oppa・nuna・eonni」などといった親族名称で、親族

[1] 終身時代であった時代とは異なり、転職が日常化しつつある今日の韓国の職場では、職階による呼称制度が労働の柔軟性を妨げるとされ、創造性と個性が強調されることもつながる水平的呼称を積極的に使うことをすすめている人が増えてきた（한겨레21, 2000）。日本でも上下関係を意識せずに本音で自由に議論しやすくするねらいで、職場によっては上司を「名前＋さん」で呼ぶことをすすめる「さん付け運動」を積極的に取り組んでいるところもあるようである（渡辺, 1998）。

[2] 林・玉岡（2004）は、韓国の職場のコミュニケーションにおける呼称選択の規範意識（適切性判断）に、特定の被験者属性、対人関係特性、性格特性がどのように影響しているかについて検討したものである。分析の結果、韓国の職場では目上の人に対して「姓名＋ssi」「姓名＋nim」といった実名で呼び合うことについて否定的には受け止められていないことが示された。また、調査で採用した対人関係尺度および性格特性尺度の重回帰分析の決定係数（R^2）が低かったため、これらの変数があくまで間接的要因ではあるが、目上の人に対する水平的呼称、つまり公式の場での名前の使用については「調和性のない」人がまた年上の上司に対する名前使用については人と距離をおいてつきあう人や心配性などの「情緒不安定」な性格の人がより適切であると判断する傾向があることが示唆された。

関係にない人に呼びかけることができる。しかし、目上の人に対する「お兄さん・お姉さん」の使用頻度は日本人より韓国人のほうが圧倒的に高く(林, 2003; 林・玉岡, 2003)[3] 、それが職場での呼称使用であってもかなり寛容的に受け止められている(林・玉岡, 2004)。韓国人の年上に対する親族名称の多用については、韓国のソウル地域の大学生を対象にした皇甫(1993)の調査においても同じ結果が見られたが、この調査では、その他に日本語の「先輩」に当たる「seonbae」の使用対象と頻度についても興味深い結果が示されている。皇甫(1993)の調査によると、「seonbae」は日本語の「先輩」の一般的な使用と異なり、親しい先輩(4 才から 5 才年上)に対して(男性の 5.4%、 女性の 11.0%)よりは親しくない先輩(4 才から 5 才年上)に対して(男性の 35.1%、 女性の 35.7%)、より頻繁に使用される傾向が見られた。このような結果は、韓国語の「先輩」を意味する「seonbae」が、親族名称に比べて少し距離をおいた呼び方であることを示唆するのであろう。

また、林・玉岡・深見(2002)では、職場の同僚の兄・姉を「お兄さん・お姉さん」と呼ぶことについて韓国人は適切であると判断しているのに対し、日本人は否定的に受け止める。初対面の小学生を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼ぶことについて、韓国人はかなり抵抗を感じるのに対して日本人は特に否定的でも肯定的でもない。そして、食堂の若い従業員を「お兄ちゃん・お姉ちゃん」と呼びかけることについて、韓国人はやや否定的に感じているのに対し、日本人はやや肯定的判断しているなどと、その使い方には微妙な違いがあることが報告されている。

一方、「実名」は、日本語の「田中一郎」や「花子」のように「김 철수(kim cheolsu)」や「영희(yeonghi)」など、その人の氏名で呼びかけることを指す。氏名を使った呼び方は、日本語と同様に「姓＋名」の順で用いるが、これらの呼び方は、実際にはそのままの形で使われることは少なく、「－nim」「－ssi(氏)」などの敬称[4]や「-a/-ya」といった呼格助詞[5]を

---

[3] 林(2003)の行った日本人と韓国人の呼称使用の実態調査では、既知の年上の人に対して、韓国人男性の 70.0%、韓国人女性の 53.2%が相手と自分との相対的位置関係に応じた親族名称で呼びかけると回答している。一方、日本人は親族名称を用いる頻度は低く(男性が 5.3%、女性が 3.0%)、むしろ実名や愛称で呼びかけることが圧倒的に多かった(男性が 86.0%、女性が 82.9%). また、職場での親族名称の使用頻度を調査した林・玉岡(2003)では、親しい間柄の先輩や年上の同僚だけではなく、親しくない先輩や年上の同僚に対しても親族名称が用いられていることが報告されている。

[4] 韓国語における敬称「-nim」は、社会的地位の高いと思われる官名・職業または尊敬するにあたいする人などの地位・役職名または、親族関係を表す言葉のあとにつけて敬意を表す。名前で呼ぶとき名前のあとにつけて敬意を表すこともできるが、これは比較的最近見られる用法であり、「-ssi(氏)」に比べ、その使用範囲が限られている(『뉴에이스 国語辞典』, 1999)。「-ssi(氏)」は、姓名や名のあとにつけて尊敬の意を表す接尾辞であるが、一般的に同等・目下に対して使われ、フォーマルまたは事務的な場面以外において、目上の人に対しては使いにくい(『뉴에이스 国語辞典』, 1999)とされる。また、「姓＋ssi」の形は、相手が目下それも雇用者であ

つけて用いることが多い。そして、この「実名」の使用は目上の人に対しては使用し難く、目下に対して用いるのが一般的である。しかし、利益追求が目的である会社などでは目上の人に対する実名の使用が、必ずしも否定的に受け止められているわけではない。例えば、職場での実名使用に関する適切性判断を調査した林・玉岡（2004）によると、公式の場で上司を「姓名＋氏」と呼んだり、役職を持たない年上の先輩を「姓名・名＋氏」と呼ぶことについて否定的には受け止められていない。また、年上の親しい同僚を「姓名・名＋氏」と呼ぶ、年上・上司を「姓名・名＋nim」と呼ぶことについても寛容的に受け止めている。とりわけ、公式の場で上司を「姓名＋氏」と呼ぶことについては適切であると判断する傾向が強いことが報告されている。しかし、このような目上に対する実名使用が職場以外の場面ではどのように受け止められているかについては、まだ本格的な調査が行われていない。そこで本研究では、大学生を対象に先輩に対する実名の使用がどのように受け止められているかについて調査し、職場での実名使用と比較してみることにする。

3. 調査方法

3.1 調査時期と被験者

2008 年 10 月から 11 月にかけて、韓国ソウル在住の韓国人大学生 161 名（女性 83 名、男性 78 名）を対象に、先輩に対する呼称使用についての適切性判断に関する質問紙調査を行った。被験者の年齢の平均は 20 才 4 ヶ月(最年少が 17 歳、最年長が 25 歳)であった。

3.2 質問紙と測定尺度

呼称使用には相手との性差、親疎関係などの対人的要因やフォーマル・インフォーマルなどといった場面的要因などによって言葉の使い分けが異なってくることが予想される。そこで質問紙では、韓国人大学生の先輩に対する呼称使用に関する適切性判断が測定できると予想される対話場面を想定し、16 種類の質問項目を作成した（表 1）。具体的には、2（親族名称・実名）×2（親しい・親しくない）×2（話し手と聞き手の関係が同性・異性）×2

る場合は用いることもあるが、相手に不愉快、無礼、生意気という印象を与えやすいこともあって、極めて限られた範囲でしか使えない。

[5] 「-a/-ya」は呼格助詞として、親しい間柄の友達、目下の者に対して用いるのが一般的で、名前が子音で終わった時は/-a/、名前が母音で終わった時に/-ya/を用いる。

表1　先輩に対する「親族名称」と「実名」の呼称使用に関する諸要因と質問項目一覧

会話場面	呼称	親・疎	聞き手と話し手の性差	質問項目	
				韓国語	日本語
「雑談」	「親族名称」	「親」	「異性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 이성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする異性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 동성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする同性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
		「疎」	「異性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 이성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない異性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 동성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない同性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
	「実名」	「親」	「異性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 이성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする異性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 동성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする同性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
		「疎」	「異性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 이성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない異性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 동성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない同性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
「授業中」	「親族名称」	「親」	「異性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 이성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする異性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 동성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする同性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
		「疎」	「異性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 이성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない異性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 동성의 선배를 「형(○○형)/누나(○○누나)」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない同性の先輩を「お兄さん(○○お兄さん)/お姉さん(○○お姉さん)」と呼ぶ。
	「実名」	「親」	「異性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 이성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする異性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 자주 이야기를 하는 동성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃よく話しをする同性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
		「疎」	「異性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 이성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない異性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。
			「同性」	후배가 평상시 그다지 이야기 해 본 적이 없는 동성의 선배를 「○○씨」라고 부른다.	後輩が日頃あまり話したことのない同性の先輩を「○○ssi」と呼ぶ。

注1. 「○○」は相手の名前で呼ぶことを示す。
注2. 質問票ではそれぞれの質問項目をランダムで提示した。

(授業中・雑談)の合計16種類である。質問項目では、これら 16 項目のそれぞれの場面での呼称使用が適切であるかどうかを、「まったく適切でない」、「あまり適切でない」、「どちらとも言えない」、「ある程度適切である」、「非常に適切である」の5段階尺度で判断してもらった。質問項目で取り上げた親族名称と実名の呼称表現はいずれも韓国語において存在するものである。したがって、これらの表現に関する適不適の判断は「このような表現が、この相手に向かって(あるいはこの場面で)使用するのは適切だ/不適切だ」という判断である。点数化するにあたり、「まったく適切でない」を−2、「非常に適切である」を 2 とし、−2 から 2までの変数として扱った。この尺度では、0 が「どちらとも言えない」になり、より適切に向かって 2 に、より不適切に向かって−2 に変化し、数値が正であれば適切の範囲、数値が負であれば不適切の範囲となる。したがって、本研究では、適切度の平均が負の数値であれば不適切の判断、正の数値であれば適切の判断と捉える。

3.3 分析方法

呼称使用に影響を及ぼす諸要因については今まで多様な議論があるものの、それらの影響関係について階層的な分析を行ったものはない。そこで、本研究では、SPSS 15.0 の Classification Trees(SPSS, 2006)の統計ソフトを使用した決定木分析[6]を用いて、韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」の呼称使用の適切性判断に影響を及ぼす諸要因の階層性を検討することにした。具体的には、図1に示したように、「呼称表現(親族名称・実名)」「会話場面(授業中・雑談)」「親疎関係(親しい・親しくない)」「話し手と聞き手の性差(異性か同性か)」「話し手の性(女性か男性か)」の5つの要因(説明変数)が、韓国人大学生の先輩に対する呼称の適切性判断(目的変数)にどのように影響するかを予測する決定木分析を行った。

[6] 「決定木(decision tree)」分析は、1つの目的変数を複数の説明変数から予測するとともに、その結果を予測力の強い順に説明変数を階層化して、樹形図(dendrogram)の形で描き出す。そのため、言語の共起頻度や要因の因果関係を調べるのに有効な解析法である(林・玉岡・宮岡, 2005; 玉岡, 2006; 林・玉岡・宮岡・金, 2007; Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka, Y., 2007; Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama. S., in press)。

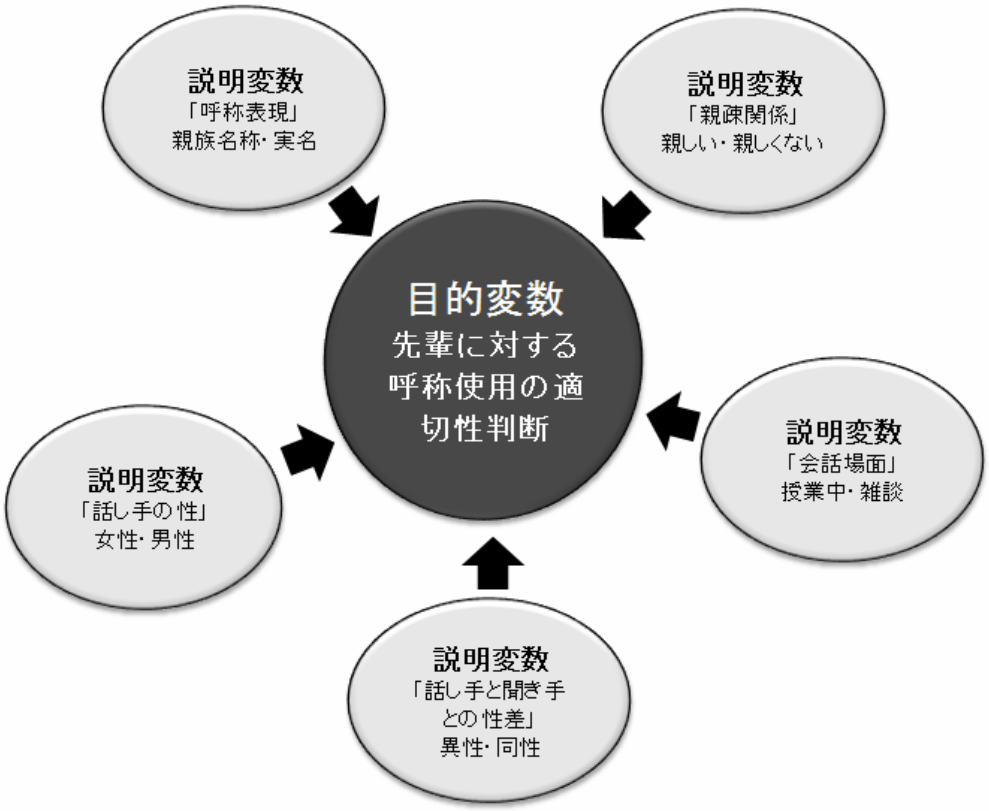

図1　本研究の決定木分析における目的変数と説明変数

4. 先輩に対する呼称使用に関する適切性判断－決定木分析の結果

決定木分析の結果は、図2の樹形図に示したとおりである。呼称使用の適切度に及ぼす要因の影響を全体的にみると、大学生の呼称使用の適切度にもっとも強く影響しているのは「親族名称」と「実名」の2種類に大別された「呼称表現」であった［$F(1, 2561)=835.430$, $p<.0001$］。「会話場面」、「親疎関係」、「話し手の性」の3つの説明変数は、「呼称表現」より弱い要因として、親族名称と実名に対して異なる影響を示した。話し手と聞き手とが同性であるか異性であるかという「話し手と聞き手の性差」は図2の樹形図には含まれていなかった。これは、この変数が適切度の有意な予測変数でないことを意味しており、適切度に対して影響していないことを示している。「呼称表現」が適切度の度合いに最も強く影響する要因として、ノード0（M=0.06, SD=1.25; M は平均、SD は標準偏差を示す。以下、M または SD とのみ記す。）から「親族名称」使用のノード1（M=0.56, SD=1.12）と「実名」使用のノード2（M=−0.68, SD=1.05）に枝が伸びている。適切度は「親族名称」の使用が正の適切度、「実名」の使用が負の適切度であることから、先輩に対しては「親族名称」を使用することが適切

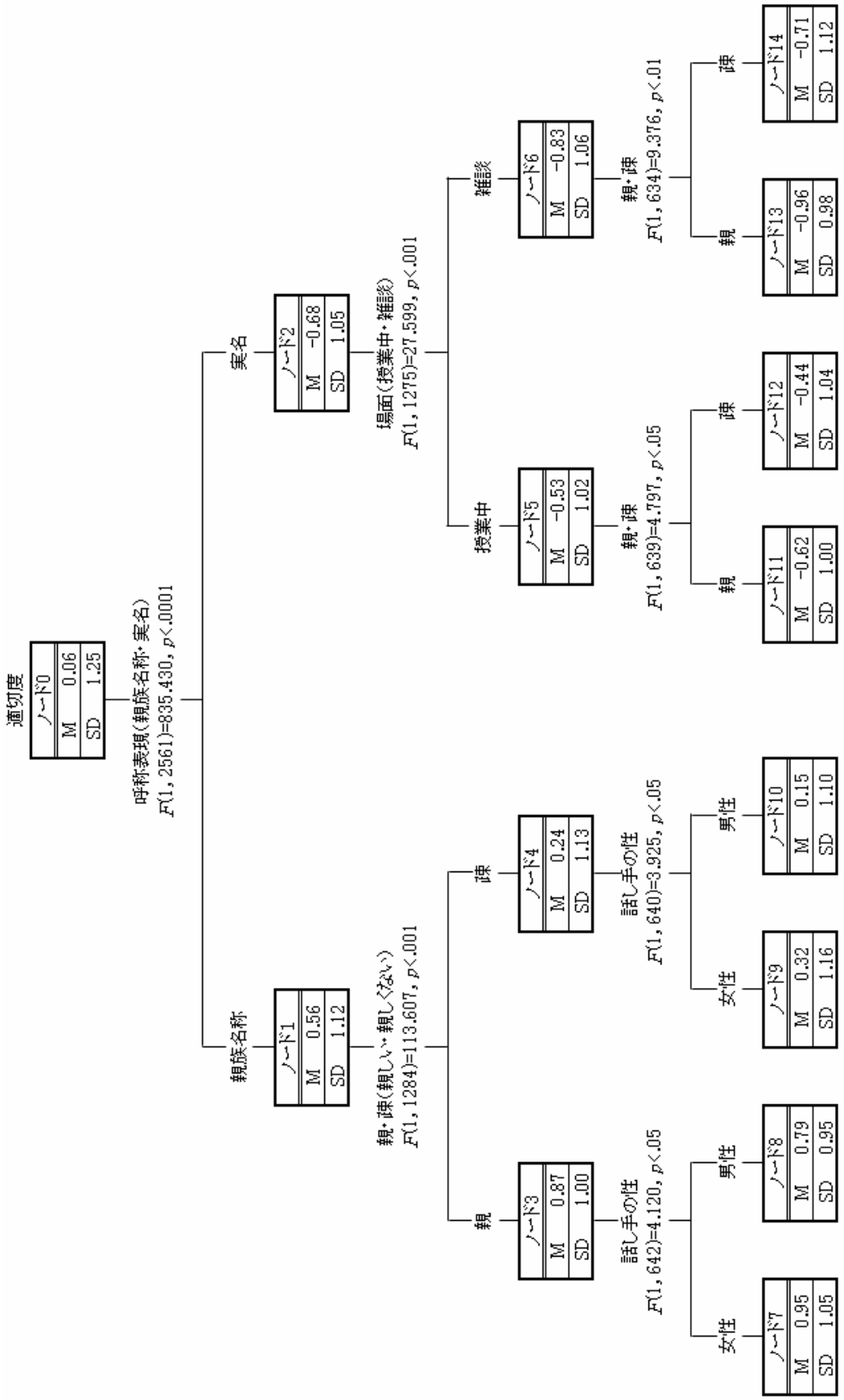

図2 韓国人大学生の先輩に対する「親族名称」と「実名」使用の適切性判断に関する決定木分析
注. Mは平均, SDは標準偏差を示す.

であり、「実名」の使用が不適切であると判断されていることが分かる。両呼称の使用に大きな違いがみられたので、図2の樹形図にそって、以下、「親族名称」と「実名」の使用を別々に報告する。

まず、「親族名称」の使用の適切性判断に強い影響を及ぼす要因として、「親疎関係」が示され[F(1, 1284)=113.607, p<.001]、ノード３の親（M=0.87, SD=1.00）とノード４の疎（M=0.24, SD=1.13）に分かれた。適切度の平均が疎の関係よりも親の関係においてより高いことから、親族名称の使用においては、あまり親しくない間柄よりは親しい間柄の人に対して用いるのがより適切であると感じていることが分かる。さらに、親族名称を親しい間柄の人に使うことに対しては話し手の性が影響しており[F(1, 642)=4.120, p<.05]、女性（ノード 7, M=0.95, SD=1.05）の方が男性（ノード 8, M=0.79, SD=0.95 ）よりも適切であると判断する傾向が強かった。話し手の性差は、親しくない間柄(疎)の人に使う場合にもその影響がみられ[F(1, 640)=3.925, p<.05; 自由度の違いは無回答が2名あったことを示す]、親しい間柄同様に男性（ノード 10, M=0.15, SD=1.10）に比べ、女性（ノード 9, M=0.32, SD=1.16）の適切度が高く、より肯定的に判断しているようである。

一方、「実名」の使用の適切性判断に影響する要因として、まず「会話場面」が示され[F(1, 1275)=27.599, p<.001]、ノード 5 の授業中（M=−0.53, SD=1.02）とノード 6 の雑談（M=−0.83, SD=1.06）に分かれた。適切度の平均が授業中のほうが雑談においてより高いことから、実名は雑談場面よりは授業中の場面で用いるのがより適切であると感じていることが分かった。さらに、授業中の場面では、親疎関係が影響しており[F(1, 639)=4.797, p<.05]、親しい関係（ノード 11, M=−0.62, SD=1.00）より親しくない関係（ノード 12, M=−0.44, SD=1.04 ）の適切度の方が有意に高かった。これは、雑談の場面においても同様の結果が見られ[F(1, 634)=9.376, p<.01; 自由度の違いは無回答が５名あったことを示す]、親しい間柄（ノード 13, M=−0.96, SD=0.98）よりは親しくない間柄（ノード 14, M=−0.71, SD=1.12）で適切度が高かった。

5. 終わりに

本研究では、韓国人大学生を対象に、先輩に対する垂直的呼称（「親族名称」）と水平的呼称（「実名」）の使い方の適切性判断とそれに及ぼす要因について調査した。その結果、韓国の大学生の場合は全体的に先輩に対しては親族名称を用いるのが適切で、実名を用

いるのは適切でないと判断していることが明らかになった。韓国の職場での呼称使用を調査した林・玉岡（2004）と比較してみると、まず親族名称の使用では親しい先輩に対して親族名称使用がより寛容的に受け止めている点は両調査とも一致しているといえよう。しかし、あまり親しくない先輩に対する親族名称の使用の場合は、林・玉岡（2004）では不適切であると判断されているのに対し、大学生を対象にした本調査ではこれについても肯定的に受け止められている点で違いがみられた。本調査の大学生同士の人間関係においては、職場での人間関係とは異なり、心理的に遠い距離にあると思われる相手に対しても親族名称が使われやすくなるのではないかと考えられる。

一方、実名使用では、先輩に対する実名の使用は全体的に不適切であると判断されており、韓国の職場では目上の人に対して「姓名＋ssi」「姓名＋nim」といった実名で呼び合うという水平的呼称使用が肯定的に受け止められつつあるとした林・玉岡（2004）の調査とは異なる結果を示した。つまり、韓国では、とりわけ大学生の仲間内では水平的呼称はまだ一般的に浸透しているわけではないことがうかがえる。これは、公的な場面を考えると、大学では授業くらいに限定されているのに対し、職場では接客や会議など多様であるため、実名の使用も頻繁に起こり易いのではないかと思われる。

また、先輩に対する「親族名称」使用と「実名」使用の適切性判断に及ぼす要因として、「親族名称」には親疎関係が最も強く影響しており、その次に話し手の性が強く影響していた。大学生の先輩に対する親族名称の使用には親しさが大きな変数として影響していることは洪（2007）でも指摘されているが、本調査の結果とあわせると「親族名称」の使用は、親しい間柄で、特に話し手が女性の場合に最も肯定的に判断する傾向が強いことが明らかになった。一方、「実名」の使用には、場面（授業中・雑談）の違いが最も強く影響し、その次に親疎関係が強く影響していた。適切度は、全体的に否定的に判断しており、特に雑談の場面での親しい先輩に対する実名使用がかなり否定的に受け止められていることが分かった。

以上を要約すると、大学生の先輩に対する「親族名称」の使用は相手との距離を縮めるために使用され、一方、「実名」はインフォーマルな場面よりフォーマルな場面でより相手と距離をおくために用いられることが示唆された。

[引用文献]

井上史雄（1991）「お兄さんとお姉さんの謎：親族名称と呼称の構造」『月刊言語』20(7): 46-51.

林炫情（2001）「韓国語と日本語における呼称の対照研究序論」『国際協力研究誌』7(1): 107-121.

林炫情・玉岡賀津雄・深見兼孝（2002）「日本語と韓国語における呼称選択の適切性」『日本語科学』11:31-54.

林炫情（2003）「非親族への呼称使用に関する日韓対照研究」『社会言語科学』5(2). 20－32.

林炫情・玉岡賀津雄（2003）「職場における「お兄さん」および「お姉さん」の親族名称使用に関する日韓対照研究」『日本文化学報』18. 21-35.

林炫情・玉岡賀津雄（2004）「韓国の職場での呼称使用の適切性判断に及ぼす属性・対人関係特性・性格特性の影響」『広島経済大学研究論集』27(1). 29-44.

林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生（2005）「味覚形容詞「甘い」「辛い」「しぶい」「苦い」「塩辛い」「酸っぱい」の基本義と別義に関する新聞および小説のコーパス出現頻度の解析」『日本語学研究』12. 131-142.

玉岡賀津雄（2006）「決定木」分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13(2). 169-179.

林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞（2007）「丁寧度の判定に関わるポライトネス・ストラテジーの要因についての階層的分析」『 韓国日本文化学会第 29 回国際大会予稿集』

Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka, Y. (2007). Effect of gender-identity and gender-congruence on levels response politeness. 『日本語用論学会第10回大会（世界大会）』予稿集. 68.

Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka,Y. Kiyama, S. (in press) Effect of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans. *Journal of Asian Pacific Communication*.

鈴木孝夫（1970）「親族名称による英語の自己表現と呼称」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』1. 147-175.

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』 東京：岩波書店.

原忠彦（1979）「親族名称」原忠彦・末成道男・清水昭俊（編）『ふぉるく叢書 9：仲間』253-308. 東京：弘文堂.

渡辺友左（1998）「呼称という論点」『日本語学』17（8）. 4-11.

한겨레 21（2000）「호칭이 파괴된다（呼称が破壊される）」http://www.hani.co.kr/h21/data/L000403/1pbt4301.html

皇甫奈映（1993）「현대 국어 호칭의 사회언어학적 연구: 서울지역 대학생 사회의 용법을 중심으로（現代国語呼称の社会言語学的研究：ソウル地域大学生社会の用法を中心に」修士論文. ソウル大学.

崔榮集（1979）「한국어와 영어에 쓰이는 호칭의 비교연구」『論文集』江陵初級大学

林 炫情（いむ ひょんじょん; LIM, Hyunjung）
山口県立大学国際文化学部 准教授
753-8502 山口県山口市桜畠 3－2－1
hjlim@yamaguchi-pu.ac.jp

玉岡 賀津雄（たまおか かつお; TAMAOKA, Katsuo）
名古屋大学大学院国際言語文化研究科 教授
464-8601 名古屋市千種区不老町
ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp

Factors determining the degree of appropriateness of ‘kinship terms’ and ‘family/given name’ usages toward seniors by Korean university students

LIM, Hyunjung
Yamaguchi Prefectural University, Japan
hjlim@yamaguchi-pu.ac.jp
TAMAOKA, Katsuo
Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University, Japan
ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp

Abstract: The present study investigated the degree of appropriateness of the usage of ‘kinship terms’ and ‘family/given name’ toward seniors by university students in South Korea. Results indicated that university students in South Korea are likely to feel that the use of kinship terms toward their seniors is appropriate whereas the use of family or given name is not. Decision tree analysis indicated that relational distance, followed by speaker’s gender, were the most influential factors in determining the appropriateness of use of kinship terms. In contrast, situation (lecture or chatting), followed by distance, were the most influential factors in determining the appropriateness of use of family or given name. Furthermore, the present study suggested that Korean university students utilize kinship terms toward their seniors to shorten their relational distance, and use family/given name in formal situations rather than informal situations to keep their relational distance.

Keywords: kinship terms, family/given name, horizontal/vertical terms, degree of appropriateness, Korean university students